

2016 年度

# 人権作品集

「人権」に関する図画選定作品

小学2年生



スマホより

顔見て話そう

友だちと

「人権」に関する標語選定作品 小学五年生

消さないで

その子の笑顔

その子の未来

「人権」に関する標語選定作品 中学三年生



人権に関するポスター選定作品

中学3年生

## はじめに

名張市・名張市教育委員会では、日常の家庭生活や学校生活、社会生活などでの体験を通して実感された、人権を守ることの大切さや偏見・差別などの社会の不合理をなくしていくことへの思いを表現した人権作品を市民のみなさまから募集しています。

本年度も、小学生・中学生・高校生・高等専門学校生をはじめ市民のみなさまから、「人権」に関する作文・標語・ポスター（図画）・フォトを合わせて一万二千二百九十二点もの応募をいただきました。今年度も、一般の方から作文・フォトの部に応募いただきました。人権作品の取組が、小中高校生から一般の方々に広がっていることをたいへんうれしく思っています。

全体を通して見てみると、あらゆる差別や人権問題の解決のため、家庭や学校・社会生活で自ら体験したことや感じたこと、学習で学んだことを通して、人権尊重の大切さや、差別をなくしていくための意見、感想が述べられている作品、また自分自身を振り返り、自分の問題としてできることをしていこうとする姿勢や意欲が伝わってくる作品が数多く見られました。日ごろの学校、地域等での人権・同和教育の取組の成果だと喜んでいきます。

この作品集には、応募いただいた作品の中から、小学生・中学生の作文十点、標語十八点、図画・ポスター二十二点、フォト一点を掲載しました。

これらの作品の中から、図画・ポスターの一作品、標語の一作品を啓発用ティッシュとして活用させていただいています。また、図画・ポスター八作品と標語の七作品を掲載した人権カレンダーも、制作しました。

この作品集を通して、人権について考えていただくとともに、さまざまな学習の場でご活用いただき、人権意識の高揚と人権・同和問題の一日も早い解決に向けて、一層ご尽力いただきますようお願い申し上げます。

最後にになりましたが、本年度、作品をご応募くださいましたみなさまに厚くお礼申し上げますとともに、来年度、より多くのみなさまにご応募いただきますよう心からお願いを申し上げます。

## 目次

### 作文

#### 【小学生の部】

○「ごめんね。」「いいよ。」	(1年生)	4
○一人じゃない	(2年生)	5
○人の気持ち自分の気持ち	(3年生)	6
○自分の気持ちと人の気持ち	(4年生)	7
○私の家族の弟	(5年生)	8
○私にできること	(6年生)	9
○一人ぼっちの気持ち	(6年生)	10
○見方をかえる力想像する力	(6年生)	11

【中学生の部】

○相手を分かるということ

(3年生) . . . . . 12

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

○「最近の若者は・・・」を読んで

(3年生) . . . . . 14

標語

【小学生の部】

【中学生の部】

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

. . . . . 17  
. . . . . 16

図画・ポスター

【小学生の部】

【中学生の部】

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

フォト(写真)

. . . . . 18  
. . . . . 21  
. . . . . 22  
. . . . . 22

「ごめんね。」「いいよ。」

(小学一年生)

おひるやすみに、Aさんと五ねんのBさんに、ひっぱられてあたまをうったのがいやでした。

「三がいであそぼう。」

とAさんがいったので、ふたりでひがしかいだんのほうへいきました。そこへBさんがきて、

「いっしょにあそぼう。」

といつてきました。ぼくが、

「Aさんとあそびたい。」

といたら、Bさんはぼくの手をもってひっぱりました。Aさんもほんたいがわの手をもってひっぱりました。りようほうからひっぱられて、とてもいたかったです。「やめて。」といおうとしたとき、ふたりが手をはなしました。ぼくは、しりもちをつけて、あたまのうしろをろうかにつけてしまいました。いたくてぼくは、あたまをおさえながらなきました。

Aさんはすぐに

「ごめんね。」

といつてくれました。Bさんも

「ごめんね。」

といつてくれたし、ちかくにきたせんせいが

「大じょうぶ。」

ときいてくれたから、ぼくはなきやみました。

ほけんのせんせいが、うったところをひやしてくれました。

きょうしつにもどったら、一ねんせいのおともだちがくちぐちに、

「大じょうぶ。」

ときいてくれて、ぼくはうれしかったです。

Aさんは、きょうしつでもなんでも「ごめんね。」といつてしんばいしてくれました。ぼくは、

「いいよ。」

といいました。ぼくがそういうと、Aさんはすこしうれしそうでした。

Bさんも、しょくいんしつであやまってくれました。ぼくは、

「いいよ。」

といつてゆるしました。

いまもぼくは、Aさんとなかよしです。Bさんとも「いろえんびつ」であそびます。三にんで、ゴジラごっこやおにごっこなどをしてあそんでいます。

すぐに「ごめんね。」といつてくれたら、すぐに「いいよ。」といえます。ぼくもわるいことをしたなどおもったら、すぐに「ごめんね。」といつています。そして「いいよ。」といつてもらったら、とてもきもちがいいです。もうしないとおもえませす。

一人じゃない

(小学二年生)

わたしは、毎日学校へ行くのがたのしいです。行きたくないと思つたことはありません。それは、大切な友だちがいるからです。

わたしは、友だちを大切にできる人になりたいと思うし、わたしも友だちから大切にされるような人になりたいです。

今、わたしは友だちから大切にされているから一人じゃないです。かぜをひいたときには心ばいしてくれて、手紙を書いてくれたり、休み時間には、

「いっしょにあそぼう。」

と声をかけたりしてくれる友だちがいるからです。

ぎやくに、わたしも友だちを大切にしています。自分がしてもらつてうれしかったことは友だちにもしています。べんきようやしゆくだいがわからずにこまっている友だちにはやり方を教えてあげたり、たすけてあげたりします。たとえば、算数のじゆぎようでは、ひっ算のべんきようをしているときにこまっている友だちを見つけ、

「これはくり上がりがあるもんだいやで。」

と教えると、すぐにできていてえがおで

「ありがとう。」

と言ってくれて、わたしはとてもうれしかったです。また、朝学校へ来るとかならず

「おはよう。」

とあいさつをするようにしています。あいさつをすると、友だちもかえしてくれるのでしぜんとなかよくなっていききました。

このように大切にし合っている友だちが学校にいるから、一人じゃないとかんじることができています。だから、もしいじめがあったと

してもわたしはこわくありません。それは、一人でもわたしのみ方をしてくれる友だちがいれば、あん心することができるところです。

しかし、テレビなどでいじめのニュースを見ると、こわくなることがあります。

「じ分もいじめられたくないから、とめることができないんじゃないか。」

と思つてしまいます。でも、じ分の友だちのことを考えると、その考え方ではいけないことがわかりました。もし、友だちがいじめられていたら、と考えると

「ぜつたいにたすけたい。」

という思いにかかります。それぐらい友だちは大切で、大きなそんざいだということがわかります。

今、わたしのクラスには友だちがたくさんいます。休み時間には、みんなでおにごっこなどをしてとてもたのしくすごします。今年てん入してきた子も、みんなからの

「いっしょにあそぼうよ。」

という声かけから、すぐになかよくなりました。

こんなに大切にしてくれて、わたしも大切にしている友だちを、これからも大じにしていけます。

## 人の気もち自分の気もち

(小学校三年生)

9月に、学年親子活動で、桔梗が丘5番町に住んでいるせんそうを体けんした3人の人の話を聞きました。その時に、

「自分の気もちを分かってもらえるようにつたえていますか。友だちの気もちをそうぞうしながらさいていますか。」

と聞かれました。そして、それが友だちとなかよくなってへいわなクラスを作るのに大事なことだと教えてくれました。

わたしは、前にAちゃんとけんかになったことを思い出しました。

わたしとBちゃんがこしよこしよ話をしていた時に、Aちゃんが、「何ていったの。それはわたしのわる口でしょ。」

と言ってきて、わたしはわる口を言っていなかったの得意な気もちになつて、

「Aちゃんのわる口なんて言っていない！Aちゃんだって、この前こしよこしよ話してたやんか。人のこと全ぜん言えへんで。それやつたら自分のそういうとこ直しや。」

と言っていました。そして、Aちゃんが泣いてしまいました。わたしも、くやしくて泣いてしまいました。先生が、

「相手がどんな気もちで言ってるのか考えてみた？自分の気もちをちゃんとつたえた？」

と言いました。わたしは、自分もこしよこしよ話をされたいやな気もちになるし、「人のこと言えへんやん。」って言われたら、とてもかなしい気もちになると思いました。そして、先生が、

「今までよりなかよくなれるようにちゃんと話をしましょう。」  
と言ってくれたので、わたしとAちゃんは、かわりばんこに自分の気もちを話しました。わたしは、Aちゃんの気もちを聞いたら、くやし

かった気もちがしぼんでいきました。たぶんAちゃんも同じだったと思います。そして自分のしつばいだったことをあやまり合つて、なかおりをしました。

やっぱり、友だちとなかよく、楽しく過ごすためには、「自分の気もちをちゃんと言葉でつたえる。」「相手の話をしっかり聞く。」ことが大事だと、わたしも思いました。これからは、それを心がけていきたいと思いました。

でも、今日も友だちとけんかをして泣いてしまいました。初めは「相手がわるい。わたしはわるくない。」と思っていました。でも、相手の子の話を聞いてみると、わたしは自分のことしか考えていなかったことが分かりました。そして、自分の気もちをちゃんとつたえようとしていなかったことも分かりました。

これからも自分の思い通りにいかななくて、いやな気もちになることがあるかもわからないけれど、できるだけ相手の話を聞いて、自分の気もちを聞いてもらえるよう、がんばっていきたくて、今、強く思っています。

## 自分の気持ちと人の気持ち

(小学四年生)

ぼくは、三年生の時のそうじ時間に、ほうきの取り合いで、友だちとケンカをしてしまいました。そして、その友だちとケンカをしている時に、友だちの頭を段差にぶつけて、おでこに大きなこぶを作ってしまった。その時は、先生と友だちと、友だちのお父さんとぼくのお母さんと急いで病院に行きました。病院でしんさつしてもらって、何もなくて良かったけれど、お父さんとお母さんには、

「もうこんなことはしてはいけない。」と、おこられました。

その後、たんにんの先生とぼくと、ぼくのお父さん、友だちと、友だちの両親とで話をしました。そこで、友だちのお父さんから、

「おっちゃんの大切な子どもにケガをさせないでほしい。あなたは、大切な物をこわされたらどんな気持ちになる？」

と、聞かれました。それでぼくは、

「いやな気持ちになる。」

と答えました。そうすると、友だちのお父さんは、

「いやな気持ちになるなら、おっちゃんもそうやからおこった。」

と話してくれました。友だちのお父さんの話を聞いて、ぼくはたいへんなことをしてしまったんだと気づきました。友だちだけじゃなく、家族もきずつけてしまったと思いました。

ぼくは、やりたいことがあったら、がまんができなくて、したらいけない時でもやってしまうことがあります。ケンカの時も、ほうきを使ったかったので、友だちも使いたかったのに、ぼくががまんできずにゆずることができませんでした。そこでもがまんできずに手を出してしまいました。ぼくは、なぜその時ほうきをゆずってあげなかったんだろうと思いました。なぜなら、友だちの気持ちを考えるとほうき

が使えなくて、とてもやさしい気持ちだったと思うし、ぼくもほうきが使えなかったらくやしい気持ちになると思います。

こんなことがあってぼくは、ほうきでは何もかいつしなないし、たいた人だけじゃなくて、周りの人もいやな気持ちにさせてしまうから、もう二度と手は出さないでおこうと決めました。そして、自分のしたいことを、やったらいけない時にがまんができるようにしたいと思いました。すぐにはできないと思うけれど少しずつ自分ではがまんできるように気をつけて行動していきたいと思いました。

四年生になってからも、ケンカをしたりすると、まだ手を出してしまふことが少しあります。だけど、三年生の頃にくらべると少なくなりました。今は、手を出すのではなく、言葉で気持ちを伝えようとしていきます。ぼくの周りの友だちはやさしくて、ぼくのことを大切にしてくれるから、とてもうれいす。そんな友だちはぼくにとつて大切な宝物だから、一人一人大切にしていきたいと思ひます。



## 私の家族の弟

(小学五年生)

「弟が話せるようになりますように。」

これは一学期に私が七夕の短冊に書いた願いです。

私の弟は、障がいをもっています。自閉しようという障がいがあり、うまくしゃべることができません。それでも私達家族は弟と毎日いっしょにくらしているのです。弟の様子やしぐさを見て、弟が何を伝えたいか、どうしているかがわかります。いっしょに過ごすからこそわかることになっていくのでそう思ってくれていると思います。

私とお母さんと弟の三人で買い物に出かけた時のことでした。お店の中で弟が、大きな声などを出した時に周りの人達がじろじろと見えてきました。その時だけだったら、まだ分かるけど、いつまでもずっといやそうな顔で見て、「うるさいなあ。」などと小さな声で言っている人もいました。私は思わず見返してしまいました。お母さんには、「あんまり見やん方がいい。」と言われたけど、なんだか、「あの子変じゃない。」と弟のことをバカにされているようでくやくして腹が立ちました。

それに、障がい者専用の駐車場に、障がいのある人以外の人止められているのもよく見るので、そんな時も、「何でそんなことをするのだろう。」と、とても残念でかなしい気持ちになります。

小さいころは、弟と遊べなくてもがまんできたけれど、今は弟とおにごっこをしたり、かくれんぼをしたり、ゲームをしたりできたらいいのかなあと思うときが時々あります。

私は、弟に対して感じる思いがあります。弟は、お母さんによく甘える甘えんぼうです。いつもおこられたらお母さんにたよっています。

それだけお母さんのことが大好きなんだなあと思います。私も、弟のことが大好きです。お母さんと私と弟、三人が三人共お互いのことが大好きなんだと感じます。

弟は、伊賀つばさ学園に通っています。だから、私とは学校がちがいます。今年、弟は私の小学校の同じ三年生の子たちと交流をする予定になっています。私は、弟のことをみんなに知ってもらおうチャンスかなと思っています。知ってもらえれば、出かけた時に声もかけてもらえる機会が増えるので弟も喜ぶと思います。

世の中には、弟のように障がいをもっている人たちや、事故で歩けなくなり車イスで生活をしている人などいろいろな人がいます。私は、どんな人でも、その人らしく、笑顔で毎日を楽しく過ごすけんりがあると思っています。みんなの笑顔があふれる世の中になってほしいです。

## 私にできること

(小学六年生)

広報「なばり」をお母さんが読んでいるのを見て、ふと目に留まったものがあります。それは「ひまわり」です。もう四百回以上ものせてあるのに私は初めて知りました。さっそく見てみると、題名にひかれました。その題名は「痛み」だったのです。

最初はプロレスごっこといって遊びだったのがエスカレートして、Aさんを中心とする五、六人に筆者はいじめられるようになりました。でも、それがいじめであると認められなくなかったそうです。学年が変わると今度はAさんがいじめられるようになったそうです。筆者はわけも分からずAさんを見殺しする輪に加わってしまいました。ある日、Aさんは筆者に何か話しかけようとしたのに、筆者は逃げるようにその場をはなれてしまいました。Aさんの悲しそうな顔は今でもはつきりと覚えているそうです。もしかしたら、Aさんは自分がいじめられる立場になってみて、初めて自分がいじめていた筆者の気持ちが分かったのかもしれない、そして今まで筆者をいじめていたことを謝ろうとしたのかもしれないと私は思いました。

お母さんと、このことについて話をしました。私は、もしいじめを見つけたらいじめている人を注意すると言いました。そうしたらいじめはなくなると考えたからです。お母さんは、それは正解と言ってくれました。でも、お母さんに、今とつても仲良くしている友だちがいじめをしているとしても注意できるのか聞かれ、私は答えに困ってしまいました。もしかしたら、注意できないかもしれない。それは、仲良しの友だちから仲間はずしをされて自分もいじめられてしまうかもしれないから…。

お母さんと話をしながら思い出したことがあります。クラスのA

くんは牛乳を飲んでいません。でも、ヨーグルトが出た時に配ってもらっているAくんを見た子たちが、いつも牛乳飲んでないのになんでヨーグルト食べてんの。そんなんやったら牛乳飲んだらいいのに。」と言っているのを聞きました。それを聞いて私は「そんなこと言ってる仕方ないのに。」と思いつつもその言葉を言えなかったし、注意することもできませんでした。Aくんは少し困った顔をしていました。お母さんには注意すると答えたけれど、やっぱり自分も言えなかったのです。だから、私は筆者がなぜいじめられる側に加わってしまったのが、少し分かる気がしました。でも、このままではいじめはなくなりません。私にできることはないかと考えてみました。

筆者は最後にこう書いています。

「人の痛みに寄り添える人間でありたい。」

私は、筆者のように人の痛みを感じ、その痛みを共感し合える人になりたいと思いました。だから私はつらい思いをしている人の気持ちを考えて行動しようと思います。いじめている人に注意できないときは、いじめられている人の話を聞きたいです。そしてどんな時でも、人に対して優しい気持ちで接していきたいです。みんながちよっと優しい気持ちを持ってあげればいじめや仲間はずしがなくなるのではないかと思います。小学校で過ごすのはあと少しです。優しい気持ちを持ってみんな楽しく過ごしたいです。

## 一人ぼっちの気持ち

(小学六年生)

私は、だれも友だちがいまま入学しました。周りのみんなは、保育園や幼稚園と一緒に遊んだりで、入学した日からすぐに、楽しそうに遊んだり、笑顔で話をしたりしていました。私は、すぐくうらやましかつたけれど、自分から声をかけることができなくて、いつも一人ぼっちでいて、本を読んだり一人遊びをしたりして、過ごしていました。

家に帰っても、遊ぶ友だちがいなかったので、弟たちと遊んでいました。弟たちと公園に行くと、自分のクラスやとなりのクラスの子たちが、楽しそうに遊んでいました。私はそれを見て、ギョツと心がしめつけられる感じがしたことを、今でもはっきりと覚えています。

二学期になって、やっと近所に友だちができて、一緒に遊ぶようになりました。だけどそこに他の子が入ると、また私だけが一人ぼっちになってしまうことが、よく起こりました。私はその頃から、学校に行くのがイヤになってきました。だけど、お母さんに言うことができなくて、とてもつらかったです。そして、その事を誰にも話すことができませんでした。

二年生になると、友だちは増えましたが、どこかでやはりついていけない自分がいて、無理をしていました。友だちの話に、無理して相づちをうったり、それほど楽しくないのに笑顔を作ったりしていました。

その頃、家では、なぜかお母さんのことを、「死んでほしい。」とか「いなくなっしてほしい。」と思うようになってしまいました。私はお母さんのことが大好きだったのに、なぜかそう思ってしまうのです。だから、苦しくてある日、お母さんにその事を打ち明けました。すると、

お母さんは泣いて抱きしめてくれました。「つらかったね。ママもつらいよ。」と言ってくれました。お母さんの胸の中で、私は心がスツとしたような気がしました。

高学年になると、親友と呼べる友だちが二人もできました。学校も楽しくて、毎日友だちとワイワイ遊んでいました。

楽しく過ごせる日がほとんどでしたが、「グループにいれなくなったら、また一人になってしまう。」ということをいつも感じてビクビクしている自分がいました。

ある日、友だちと遊んでいると、一人ぼっちになっている子がいました。その子は一人で、ポツンと椅子に、座っていました。それはまるで、一人ぼっちだった頃の自分を見ているようで、心がギョツとなり、自分のことのように、つらくなりました。私は迷わずに声に出して言いました。

「一緒に遊ぼう。」

するとその子は、にっこり笑って、「うん。」

と私たちの輪に加わってくれました。お母さんに抱きしめられたときと同じように、心がスツとしました。

私はいつも周りに気配りをして、あの頃の自分のように、一人でつらい思いをしている人に、その人の気持ちを理解して、寄り添って生きていける人になりたいです。一緒に涙を流しながら抱きしめてくれたお母さんのように、悩んで傷つきかけてギョツとしめつけられていた一人ぼっちの気持ちを、スツと柔らかくしてあげられる人になりたいです。

## 見方をかえる力想像する力

(小学六年生)

ある日、けんかをしている子たちがいきました。僕は関わりたくなくなつたので、見て見ぬふりをして、その場から立ち去りました。

そのけんかがいじめへとかわってしまいかもしれないと思うと、立ち去ってしまったことを後悔しています。

「誰かが止めてくれる。」

というぼくの思いがいじめを引き起こす原因になることがあるとわかりました。

一学期の人権学習で服部先生から「見て見ぬふり」がいじめをうむことを学びました。

僕の心は、痛みました。

「あのととき止めていれば。」

と、思ったけれど、もう過去に戻ることはできません。二度とそんな思いは、したくありません。今度そんな光景を見たら止めようと強く思いました。「言葉からいじめは起こる。」ということも学びました。

言葉からいじめがうまれるなら、ぼくも人を傷つけていじめの原因になっているかもしれない。いじめや差別は自分から遠い存在だと思っていたけれど、話をきいて、いじめや差別は僕たちの身近にあり、自分が今までしてきたことがいじめにつながっていくということがわかり、いけないことをしてきたと思いました。

先生から、「ほかの人の気持ちを想像する力」の大切さも聞きました。僕は、いじめられている人や弱い立場の人の気持ちを想像しなかつたと思います。

今は、もし自分がいじめや差別される立場だったら、と考えるようになりました。

社会見学で名古屋人権センターに行きました。ここでは、目の見えない人や車いすにのっている人の体験学習をしました。

体験をした後に僕は初めて、こんな色んなことができるんだ、ということがわかりました。

体験をする前、ぼくは、人のことを見た目だけで判断して、「目の見えない人は、何も見えなくて何もできなくてかわいそう」とか「車いすの人はいつも車いすにのっているから運動もできないんだろな」と、その人たちを自分より下に見て、決めつけた見方をしました。この時、服部先生から「見方を変える力」の大切さを教えてもらったことを思い出しました。

目の見えない人のための点字や車いすの人のためのスロープがいろいろなところに設置されています。どうしてこんなところにあるのかなと深く考えていませんでした。目の見えない人の気持ちを想像することもしませんでした。アイマスクをして目のみえない人の体験をしたり、車いす体験をしたりすると、その大切さがよくわかりました。ぼくは、点字やスロープをいろいろなところに設置してほしいと思いました。目のみえない人の気持ちがよくわかりました。想像する力をつけることが大切なことがわかりました。

ぼくがこれまでやっていた「見て見ぬふり」や「決めつけ」は、とてもはずかしいことだと思えます。

これからは、見て見ぬふりをしたり、決めつけたりする自分をやめて、見方を変えて、ほかの人の気持ちを想像できる自分になりたいと思います。

相手を分かるといふこと

(中学三年生)

僕が最近読んだ本に、少し変わったおばあさんがいた。ストーリーにはそれほど重要ではなくて、脇役なのに忘れられない。

そのおばあさんは全然いい人じゃない。むしろその逆だ。自分の家柄を自慢して、見下すような態度をとるので、みんなから嫌がられている。

僕もそのおばあさんが、地主だの惣領だのと時代錯誤なことを言つて、人をばかにする様子が腹立たしかった。自分の孫のために中学生にお金を渡して仲良くしてほしいと頼むところなんて怒りを通り越して、あきれれるほどだ。

しかし、読み進むとおばあさんのことが少しずつわかってきて、不思議なほど僕の気持ちも変わっていった。

おばあさんの家は地主で、お金持ちの娘だった。結婚して三人の子供に恵まれたが、ある日夫が家を出て行き、自分一人で子供たちを育てることになった。そして、誰が見てもはずかしくない立派な子に育ててみせると決意する。厳しく育て過ぎたのか上の二人は海外に行つたきり、音沙汰がない。三番目の娘は口げんかから家出してしまい、それ以来一人暮らしだった。僕はおばあさんが少しかわいそうに思えた。自分の弱い所を人に見せたくなくて憎まれ口をたたいたりごう慢な態度をとってしまうのかもしれない。

お金を渡したのも、孫のために何かしたいと思つても、誰にも相談できず結局どうしていいかわからなくなりあんな行動をとつたのかもしれない。

おばあさんのことを知る前と知つた後では僕の心はずつかり変わった。

そういえば小学生の頃にも同じような経験をした。僕は自転車が好きで、学校から帰るとすぐ自転車で走り回った。会う人には、小学生らしく大きな声で挨拶してたけど、あるおじいさんは挨拶を返してくれなかった。僕は意地になつて会うたびに挨拶したけれど、ぜんぜんだめだった。

悔しい気持ちを抑えきれなくて、母に文句を言つたら意外な返事が返ってきた。

「おじいさんは耳が遠いのもかもしれない。」

そんなこと考えもしなかった。無視じゃなくて、本当に聞こえていなかったのか。そういえばいつも背中を向けて草引きをしていた。後からは聞こえにくかったのかもしれない。

母はおじいさんのことについても教えてくれた。おじいさんの長男は小さい子供二人を残して急死してしまつたこと。年に一度だけお盆の時期にお嫁さんとその子供たちが訪ねてくること。最近急に見かけられるようになったおじいさんはそれを楽しみに草引きをしていたのだ。

あの時も、さつきまであんなに怒っていたのに、話を聞いたとたん急におじいさんに優しくしたいと思つた自分の気持ちの変化に驚いた。

相手のことを知らなければ心の中に壁を作つて、敵対心を持つこともある。逆に、相手のことを知れば壁を取り払つて、気持ちに寄り添いたいと思う。

全ての人のことを知ることはできないけれど、自分本位な見方で勝手な思い込みをしないように相手に関心をもつて接することが大切だ。

「きらいだ。」とか「変わつてる」とかそんな一言で片付けるのは簡単だけど、その人を拒否してしまつてはいつまでも分かり合えない。知らなくても想像し、思いをめぐらすうちに、きっと相手を受け入れ

られるようになる。

違う人種でも、同じ国の人じゃなくても、障がいを持っている人でも、気の合う人でなくても、まずはどんな人としても、その人を知りたいという気持ちで、心を開き、お互いを尊重し合える第一歩なのではないのかなと思う。

あのおじいさんがやさしく挨拶を返してくれた時、本当に僕はそう思えた。

「最近の若者は…」を読んで

(高校三年生)

この題名を初めに見た時、最近の若者は…に続く言葉はマイナスな言葉なんだろうなと思っていました。でも、読んでみるととても良い話で、それと同時にお年寄りの人はめんどくさいなと思っていた時期が自分にあつたことを思い出しました。

昔、マナーの悪いお年寄りばかりと出会う時期がありお年寄りの人は嫌だな、若者にばかり文句を言つて自分は目に付いてしまうようなマナー違反をするのか、と憤っていました。しかし、よく考えると自分の祖母は誰にでも優しく、私にマナーなど多くのことを教えてくれた、人生のお手本にしたいと思うとても良い人です。こんな良い人がいるのに、簡単に纏めてお年寄りの人は嫌いだと思うのは良くないと、小さい頃に考えたのを覚えています。

他にも、テレビの報道では介護の仕事はしんどい、汚い、給料が安い、介護職の人が事件を起こしたなどのマイナスなイメージで伝えられていることが多いです。その報道を聞いて、私自身も介護の仕事は大変なんだなとマイナスなイメージを持っていました。しかし、あるテレビ番組で現役介護福祉士の人が、介護の仕事について、

「お風呂に入れたり、パンツを替えたりとか、そこが介護の一般的なイメージですが、あくまでそれは生活の一部です。介護の仕事は、自分の人生を最後まで自分らしく生きる為に何をするべきか、どうやって死んでいきたいか、どういう姿で最期を迎えたいか、ご本人の思いとご家族の思いを実現するために、お風呂のお手伝いやリハビリのお手伝いをするというものです。介護や福祉の仕事をしている方々は、一人ひとりの思いが実現できるようにとモチベーションを高くして働いています。」と、語っていました。

それを聞いて私は、少ない情報である一面のみを見て、人や物事の全体像を把握しようとしていたことや、メディアや他人の意見に流されていたことに気が付きました。介護の仕事は実はとても素敵なことだったのだと感じました。

世の中には、おそらく自分が想像しているよりも何十倍、何百倍もの考え方や情報が飛び交っています。その情報もすべてが正しい訳ではなく、考えも人によつては自分が正しいと思つたことが他人にとつて間違いだということもあります。介護の仕事のように、聞いて初めてわかる素敵なことが他にも沢山あるはずで、沢山の知識や情報を得て、自分の頭で考えることで自分自身の経験値を増やし、色々な判断ができる人になれるように努力したいと思えます。





# 標語

## 【小学生の部】

- ・スマホより 顔見て話そう 友だちと (五年生)
- ・いじめを止めよう あなたの声で 行動で (五年生)
- ・人はみな ちがう個性で おもしろい (五年生)
- ・いやがらせ 見てないふりは もうやめる (五年生)
- ・笑顔いっぱい 幸せいっぱい 友達いっぱい (五年生)
- ・かげ口は みんなの心 きずつける (五年生)
- ・大丈夫 あなたはいつも 一人じゃない (五年生)
- ・たくさんの 人とのつながり 大切に (六年生)
- ・一人より つながる手と手 あたたかい (六年生)
- ・笑顔のバトンわたすから あなたもだれかにわたしてね (六年生)

【中学生の部】

・ありますか にげる勇気と 助ける勇気

(一年生)

・大丈夫 自分らしさは すてきだよ

(一年生)

・消さないで その子の笑顔 その子の未来

(三年生)

・無関心 それもいじめと 同じこと

(三年生)

・誰もいない 君の代わり 僕の代わり

(三年生)

【高校生・高等専門学校生・一般の部】

・大切にしよう 自分の気持ち 相手の気持ち

(高校一年生)

・理解しよう 相手の気持ち 伝えよう 自分の気持ち

(高校一年生)

・あなたの中の優しい心 しまっておいたら無関心

勇気を出せば思いやり

(高校一年生)

# 図画・ポスター 《小学生の部》



1年生



1年生



2年生



2年生



2年生



3年生



3年生



4年生



4年生



4年生



5年生



5年生



6年生



6年生



6年生

# 《中学生の部》



1年生



3年生



3年生



3年生



3年生

## 《高校・高専・一般の部》



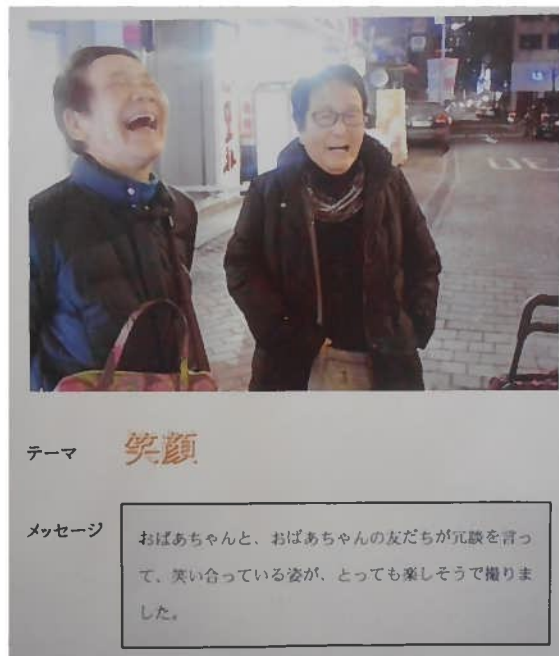
高校1年生



高校1年生

フォト

## 《高校・高専・一般の部》



高校2年生



—人権作品集—

2017年1月発行

名 張 市

名張市教育委員会

この冊子は再生紙を使用しています。